NO.77

蓬左

HÔSA

重要文化財　十六羅漢図のうち　第十六尊者　金大受筆
（東京国立博物館蔵）

名古屋市蓬左文庫
HÔSA LIBRARY, CITY OF NAGOYA

展示室1

大陸文化の薫り
―清朝の美術工芸―

江戸時代、日本は長崎を窓口として中国・清と交易を行っていました。しかし、自由な往来は禁じられており、当時の人々が清の文化について見聞きできたことは極めて限られていました。清の皇帝が使用したような最上級品はまったく日本へ渡来しておらず、日本人がそれらを手に入れられるようになったのは、近代以後のことです。とはいえ、そのような制限の中でも、隣国の文化に関心を向け、さまざまな品物や情報を手に入れたいと考える人は数多くおり、大名家の収蔵品の中にもその痕跡が残されています。

尾張徳川家に伝えられた美術工芸品・書籍・絵図を中心に、江戸時代の人が接していた「清」のすがたを探ります。

花鳥図屏風（部分）　孫億筆
六曲一双　（徳川美術館蔵）

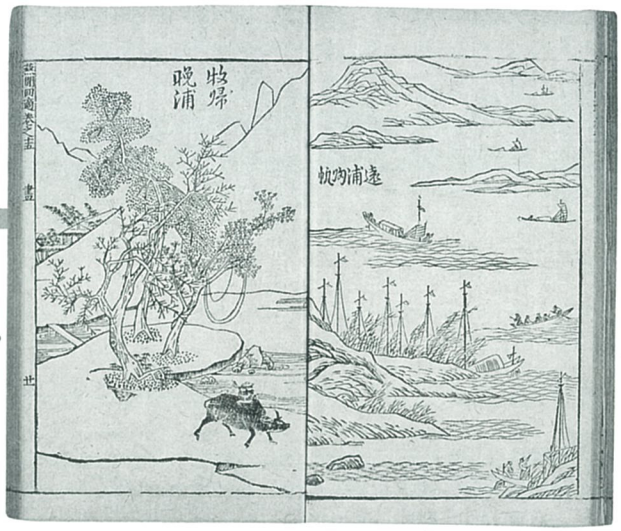
孫億は中国清代初期の画家。彼の作品は早くから日本に舶載され、花鳥画を中心に現存作品も多い。落款により康熙45年（1706）の作と知られる。

清朝中外輿地図　十六枚のうち　直隷（現　河北省）

清・康熙帝（1654～1722）の命により、イエズス会士の指導で1708～1717年にかけて作成された西洋式の測量法による中国の地図「皇輿全覧図」の写し。嘉永4年（1851）、当時の藩主十四代慶恕（慶勝）に献上された。

展示室2

尾張の殿様　二代徳川光友の蔵書



燕間四適（えんかんしてき）　明・孫不顕編　刊

琴、囲碁、絵画などの技法についての書籍。写真は、絵の描き方について手本が示されている。

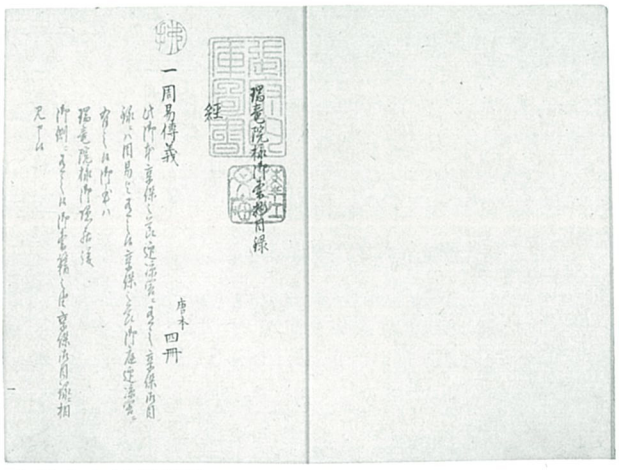
尾張徳川家二代光友（一六二五～一七〇〇）は、初代徳川義直（一六〇〇～五〇）の長男に生まれ、父の没後に家督を継承しました。妻は三代将軍徳川家光の娘千代姫で、長男綱誠（三代）・二男義行（高須家初代）をもうけました。

父徳川義直の後を承けて尾張藩の体制を確立させた光友は、文武両面に秀で、書は定家流を能くし、絵画にも優れていました。

徳川光友の集めた書籍は、後世の蔵書目録に記された確実なものだけで、三一八件四〇九一冊を数え、さらに約九〇〇〇冊に達するともいわれます。父義直から相続した分と合わせれば、光友の蔵書は二万冊以上にも及んだと思われます。

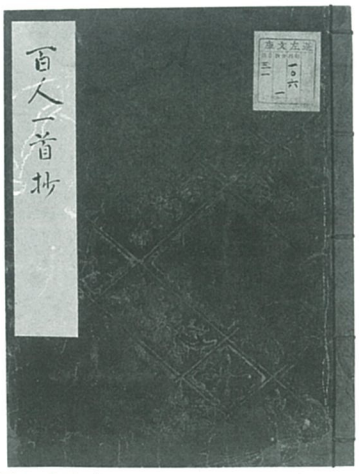
父徳川義直と同様積極的に中国から輸入した書籍のなかに、中国の画譜や書道関係の書籍がみられること、和書では歌書や物語など日本の古典に優れたものが多い点などに、光友の趣味や好みが反映されていると思われます。

徳川光友が集めた書籍の三分の二は、現在も蓬左文庫に所蔵されています。そのうちから代表的なものを紹介します。



御文庫御書籍目録（おぶんこごしょせきもくろく）　四　寛政年間写

瑞龍公（徳川光友）の蔵書目録の冒頭。



百人一首抄（ひゃくにんいっしゅしょう）　細川藤孝著　慶長年間写

展示室1・2　徳川美術館本館（徳川美術館本館では10月4日（土）より開催）

秋季特別展

室町将軍家の至宝を探る

室町将軍家、とりわけ三代義満から八代義政に至る十五世紀の将軍たちは、積極的に中国の美術品を蒐集し、唐物に彩られた新たな文化の創造を導きました。室町将軍家のコレクションは後に「東山御物」として尊ばれ、それらの作品を通じて日本における中国美術鑑賞の「眼」が形づくられました。本展では、まさにその代表とも言える名品、梁楷筆「出山釈迦・雪景山水図」三幅対（国宝・東京国立博物館蔵）をはじめ、徽宗皇帝筆とされた四幅対の一つ「夏景山水図」（国宝・久遠寺蔵）など、室町将軍家の宝物として伝えられた名画を一堂に集め、その精選された美の世界を再現します。

また、伝世作品に残された様々な仕事の痕跡から、室町将軍家専属キュレーターのような役割を担ったとされる、能阿弥・藝阿弥・相阿弥などの同朋衆の活動にも光を当てます。

蓬左文庫展示室では、「君台観左右帳記」の世界と題して、室町時代の人々が共有した唐物の見方を探ります。唐物が貨幣の代わりにもなって流通した室町時代は、唐物の分類や序列の体系化がもっとも必要とされ、進んだ時代でし

灰被天目　銘　虹　（文化庁蔵）

「東山御物」と伝えられ、有名な灰被天目の優品。釉の光沢が場所によって微妙に変化し、虹のように見えることから名付けられた。

梔子連雀文堆朱盆・青磁袴腰香炉（徳川美術館蔵）

元時代にさかのぼる名品の盆に、砧青磁の香炉を添えた。この盆はかつて「剔紅」と呼ばれていた。細かな分類の背景に、唐物を見きわめる熱心な眼差しをうかがうことができる。

た。「君台観左右帳記」の記述を、現存作品に対照させながら読み解きます。

「青磁茶碗　銘　馬蝗絆」（重文・東京国立博物館蔵）などの名物茶の湯道具も含め、国宝八件、重要文化財三十二件、重要美術品八件など、計一七七件の作品の展示を予定しています。なお、会期中に展示替えを行います。

重要文化財　花鳥図屏風　能阿弥筆　（出光美術館蔵）

「天下の明人」と呼ばれた能阿弥は、同朋衆の一人として将軍に仕え、座敷飾りや御物の管理を手がけただけでなく、鑑定家・修復家・連歌師・能書家・画家などの役割もこなした。本図は、こういった職務の過程で目にしたであろう牧谿の作品をもとに描かれている。

国宝　夏景山水図　伝 胡直夫筆　（久遠寺蔵）

北宋・徽宗皇帝の筆になる四季山水図四幅対として、室町将軍家に収蔵されたうちの一幅。足利義教邸へ天皇が行幸した際の飾りとして用いられた。世界に現存する南宋時代の山水人物画の中でも、もっとも優れた作品の一つと位置づけられている。

表紙作品解説

重要文化財
十六羅漢図のうち　第十六尊者　金大受筆（東京国立博物館蔵）

金大受は、中国の画史には記録されていない職業画家であるが、日本では「西金居士」と呼ばれて著名であった。「西金居士」の名は、落款の「大宋明州車橋西金大受」の読み方を誤ったことに由来する。「君台観左右帳記」には、このような日本でのみ評価された中国画人が数多く掲載されている。

平成21年1月4日(日)～2月15日(日)

展示室1

遊びながら学ぶ
―江戸から明治の教育アイテム―

机に向かって本を読むばかりが、「勉強」ではありません。「学ぶ」の語源は、「まねぶ」すなわち真似をすること、お手本にならって自分のものにすることも一つの学習方法です。しかし、日本には古くから、楽しく遊びながら必要な知識を身につける教育アイテムが実に豊富にありました。

今日でも現役のかるたや双六、なぞなぞ本のほか、子供向けの判じ絵や物尽くしの浮世絵、ビジュアルな絵本など、遊んで学べる教育アイテムは、好奇心豊かな子供の心を惹きつけ、その知識供給に一役買ってきました。尾張徳川家伝来品の中には、「大名かるた」や「武器かるた」、幼き藩主が家臣を把握するために手作りした「家臣双六」など、大名家ならではのちょっと変わったものも見られます。「遊びながら学ぶ」を観点に、江戸時代から明治時代のおもしろ教育アイテムを紹介します。

草花のはんじ物
(徳川美術館蔵)

大名かるた
(徳川美術館蔵)

展示室2

尾張名所めぐり

江戸時代の初め、徳川家康によって都市名古屋が創られて以降、尾張(愛知県西部)は東海の中心として幕末まで繁栄しました。しかし明治の世となると尾張藩が廃止され、政治都市名古屋は衰退しました。

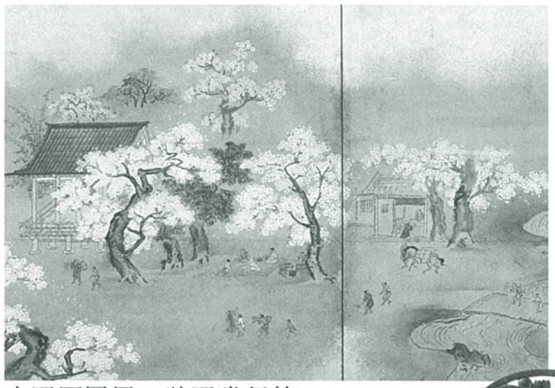
今回『尾張名所図会』を中心に、繁栄していたころの尾張各地の風景を、現代と対比する形でご紹介します。書物に残された風景をご覧になることで、昔の尾張名古屋に対する皆様のイメージをまた新たにしていただければ、と思います。

東山公園での花見の様子
平成20年(2008)撮影

尾張名所図会前編[東山の春興]
天保15年(1844)　岡田啓・野口道直編

平成21年2月18日(水)～4月5日(日)

展示室1
桜 さくら



吉野図屏風　狩野常信筆
(徳川美術館蔵)

流水に桜花図透赤銅鐔
(徳川美術館蔵)

色づき膨らんできた蕾に心をとめ、咲きはじめから満開へ、そして花吹雪となって散り果ててしまうまで、日本人にとって桜の花は、他の花にない特別な思いが込められてきました。和歌や物語をはじめとする文学作品をはじめ、絵画、あるいは染織品や調度品など身のまわりを装うためのデザインなどにも好んで用いられ、生活の中に深くとけ込んできました。

切り込みのある花弁一枚の可憐さ、さらに一輪一輪の美しさ、その花が寄り集まり雲か霞と見まごうほどに春爛漫と咲き誇った豪華さ、篝火や雪洞に浮かび上がる妖艶な夜桜など、美術に取り上げられ表現されてきた桜は、クローズアップした姿からあたりを明るく穏やかに包み込む春の盛りの風情に至るまで、さまざまに表現されてきました。

桜の名所、吉野山や嵐山を扱った絵画、吉原の夜桜を扱った浮世絵、潔く散る花ゆえに甲冑や刀装具などに用いられた小桜革、川面に散った桜の花びらが筏のように連なって流れる情景から生まれた「花筏」の意匠など、さまざまな桜の姿を取り上げます。

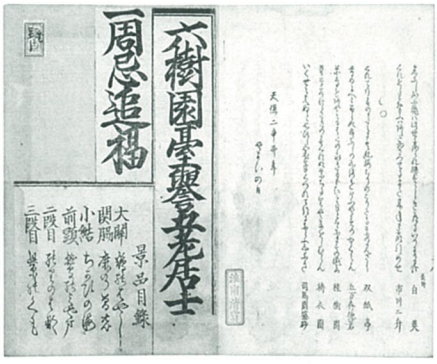
展示室2
狂歌の世界

狂歌は、五・七・五・七・七の和歌の形式に滑稽な内容を盛り込もうとするものです。狂歌は古くからありましたが、和歌の権威が強い時代には歌人や連歌師らの余技に過ぎませんでした。中世の伝統に縛られない近世に入ると狂歌は盛んに成りました。

まず、上方で松永貞徳の俳諧の門人を中心に狂歌が普及し、その流れを汲む鯛屋貞柳が、元禄から明和期の大阪で活躍するとともに、上方狂歌が大流行しました。名古屋でも、貞柳の門人秋園斎米都、その弟子永日庵其律が中心になって、門人を多く集めました。

上方に対して、江戸は独自の動きをみせました。内山椿軒門下の唐衣橘洲、四方赤良(太田南畝)らによって明和六年(一七六九)に開かれた狂歌会から、本格的な江戸狂歌が始まりました。天明三年(一七八三)には、橘洲編『狂歌若菜集』、赤良編『万歳狂歌集』が刊行され、江戸狂歌は急激なブームとなりました。その流行は名古屋にもおよび、寛政九年(一七九七)ころには橘洲門下の雪丸、田鶴丸らが多くの門人を集めていました。

狂歌の大流行で、狂歌の宗匠のもとで狂歌会が開かれたほか、家族や知人らとともに日常生活のなかで狂歌を楽しんでいました。当時の小説(戯作)のなかでも狂歌がとりあげられています。雑賀重良旧蔵書を主に、名古屋関連の資料を紹介します。



春のなごり　天保2年(1831)刊

六樹園(石川雅望)一周忌追福のため、西来居らが撰じたもの。巻末の狂歌会のチラシ。

源氏物語千年紀『源氏物語』の世界

紫式部によって著された『源氏物語』は、今からおよそ千年前の平安時代に成立しました。『源氏物語』は、その成立以降現在にいたるまで、わが国を代表する古典として読み継がれ語り継がれ、数多くの写本や、梗概書や注釈書・研究書なども多く記されてきました。また各時代にわたり絵画化が試みられ、調度品や衣服などにも『源氏物語』にちなむ意匠が凝らされました。

"源氏千年紀"にあたる本年、蓬左文庫展示室1のなかで、『源氏物語』にちなむさまざまな作品を取り上げ、その享受の一端をご紹介します。

今秋、徳川美術館第5展示室で国宝「源氏物語絵巻」が公開（11月22日～30日）される時期に合わせ、三井家に伝来したと伝えられる「源氏物語」五十四帖（個人蔵）が初公開されます。本書は十七世紀中頃に大名や公家の姫君のための婚礼調度本として調進されたと考えられ、一部に朱と金泥（きんでい）を用いつつ白描で描き出した全二百二十六におよぶ挿図があります。この図様は慶安・承応版「絵入源氏」と密接な関係があり、今後の研究が待たれる貴重な作品です。

源氏物語　若紫　五十四帖のうち　（個人蔵）

蓬左文庫

名古屋市蓬左文庫　〒461-0023 名古屋市東区徳川町1001番地　TEL（052）935-2173　FAX（052）935-2174
ホームページ　http://housa.city.nagoya.jp/〈蔵書検索もできます。〉

交通案内

■公共交通機関をご利用の場合

●名古屋駅より

【市バス】名古屋駅バスターミナル（テルミナ2F）グリーンホーム7番のりば基幹2号系統、「徳川園新出来」下車徒歩3分

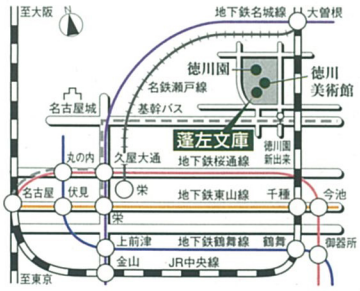
【名鉄バス】名鉄バスセンター（メルサ3F）4番のりば基幹バス「引山」方面行「徳川園新出来」下車徒歩3分

【ＪＲ】JR中央本線、「大曽根」下車南出口より徒歩10分

【地下鉄】東山線「藤が丘」方面行、「栄」で名城線「右回り」に乗り換え「大曽根」下車3番出口より徒歩15分　桜通線「野並」方面行、「車道」下車①番出口より徒歩15分

●栄より

【市バス】栄バスターミナル（オアシス21）3番のりば基幹2号系統、「徳川園新出来」下車徒歩3分



■お車をご利用の場合

蓬左文庫専用駐車場はありません。徳川園駐車場（有料　30分　120円）をご利用下さい。

ご利用案内

■休館日／月曜日（祝日のときは直後の平日）　12月15日（月）～1月3日（土）特別整理、年末年始休館
但し12月27日（土）・28日（日）エントランス・閲覧室開室

■展示室／有料　一般：1200円　高大生：700円　小中生：500円（蓬左文庫・徳川美術館 共通観覧）
【開室時間】午前10時～午後5時（入室は午後4時30分まで）

■閲覧室／無料・館外貸し出しはいたしません。
【閉架図書】午前9時30分～午前12時　12時45分～午後5時　【開架図書】午前9時30分～午後5時
【複写サービス】保存など支障のない範囲で、CD-Rからのプリントアウトまたはマイクロフィルム複写などの方法により行います。電話・郵便による申込みも可。

「蓬左」第77号　☆平成20年10月1日発行　☆編集・発行：名古屋市蓬左文庫　☆無料　☆不定期刊行　☆印刷：菱源（株）
※古紙パルプを含む再生紙を使用しています。

nagoya 400th 2010 名古屋開府400年